

活動報告書

報告者氏名： 遠藤 充彦 所属：福島県立郡山養護学校 記録日：平成26年2月14日

【対象生徒の情報】

- 学年 高等部3年生の男子生徒 (*以下、Aと記す。)
- 障害名 脳性まひ
- 障害と困難の内容 準ずる教育課程を履修している。本校寄宿舎に入舎し通学している。四肢まひがあり電動車椅子で学校生活を送っている。書字に困難さがみられ、ノートへの書字にはかなりの時間と労力を要している。パソコンに関する知識は豊富で、「工業」の時間にP検3級の取得に向けて意欲的に学習している。ローマ字でのキーボード入力は可能であるが、右手の人差し指のみで入力するため時間がかかる。普段は社交的で話好きであるが、人前で話すことを苦手としている。

【活動目的】

- 当初のねらい 就労に向けた進路学習の一環として実施する「産業現場等における実習」(*以下、現場実習と記す。)の学習にて、手軽に持ち運べて操作も容易なiPadを活用することで、書字サポートをはじめ、現場実習に関する事柄や情報を主体的に発信・受信、または処理をする。この経験を通して、卒業後の生活に向けて自信をつけるとともに、自己肯定感や達成感を得られるようにすることをねらいとした。

テーマ「主体的な参加と社会生活の自立を目指して」
～産業現場等における実習でのタブレット端末の活用から～

- 実施期間 平成25年5月末から平成25年9月初旬まで
- 実施者 遠藤充彦
- 実施者と対象児の関係 学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

○対象生徒の事前の状況

卒業を控えて

障がいの特性から生活全般(着替え・排せつ・食事・学習の準備や片付け等)において常に受け身になることが多く、社会的視野や経験の幅も狭い様子がうかがえる。卒業を間近に控え、Aもそれを自覚しており、今後は卒業後の生活を見据えて自分を変えていかなければならないと強く感じている。卒業後の生活に向けては、「対人コミュニケーション能力を高めること」と「何事にも積極的にチャレンジしていくこと」が課題であるとAは自分なりに分析している。

現場実習の概要

本校では、高等部2・3年生に対し、就労に向けた進路学習の一環として6月に現場実習を実施している。Aの場合実習期間は1週間(5日)で、実習中は寄宿舎を離れて自宅から実習先である地域活動支援センター(福祉サービス事業所の一つ)に通勤し、パソコンを使った名刺・広告作りや点字シート作成等の活動体験を行う。

学校では、現場実習に向けて事前学習、実習中の取り組み、事後学習を行う。Aには、以下の8つの学習活動が必要となる。

〈事前学習〉

- ①実習先の概要、実習に関する日程の確認、②実習先へのあいさつと事前打ち合わせ

〈実習中の取り組み〉

③実習日誌の記入、④実習中の帰宅報告、⑤実習先との反省

〈事後学習〉

⑥実習先へのお礼状作成・送付、⑦実習の振り返り、⑧現場実習報告会での発表

○活動の具体的内容

上記、「現場実習の概要」の8つの学習活動のうち、①、②、③、④、⑦、⑧の場面でiPadを活用した。

①実習先の概要を把握し、実習に関する日程を確認する。

→ インターネット（*図1）で実習先の場所や施設の概要等の調べ学習をした。また、カレンダー（*図2）に実習に関する予定を入力し、スケジュールを管理するようにした。



図1 『Safari』



図2 『カレンダー』

②実習先にあいさつへ伺い、事前の実習打ち合わせをする。

→ アプリ『ジョブズの簡単！履歴書』（*図3）の「自己PR書」を活用し、簡単な自己紹介書を作成した。事前に実習先へメールにて送信し、実習先へのあいさつとした。



図3 『ジョブズの簡単履歴書』

* アプリの特徴

このアプリ（*図3）は、履歴書、自己PRのフォームに入力した内容をそれぞれのフォーマットに直してPDF化し、そのままメールで送信できるというものである。特に、自己PR書のフォームは、簡単に写真と文章を貼付・入力することができる。

* 選定理由

Word等で作成する場合は、文字入力、レイアウト、写真の貼付など、マウスを使って調整しなければならず、Aにとってかなりの労力を要する。その点では入力フォームができあがっているため、写真の貼付やコメントの入力が容易にできる。また、そのままメールで送信できる点も便利であると考えた。さらに、実習先とのやりとりは基本的には教師が行うが、Aが自ら実習先への事前あいさつや個人情報の伝達をする機会を設けることにより、卒業後の生活へ向けた経験と意識づけ、主体性の伸長につながるのではないかと考えた。

- ③実習日誌に一日の活動内容や反省を記入する。
- ④実習が終了して自宅へ帰ったら、学校へ帰宅報告をする。
- ⑦記録をもとに実習の振り返りをする。



図4 『カメラ』

→ 一日の活動の様子をカメラ・ビデオ機能（*図4）で記録をした。

そして、一日の活動の反省と帰宅報告を併せ、再度『ジョブズの簡単！履歴書』（*図3）を活用し、実習の様子を写真を取り入れながら反省をまとめ、その日のうちに担任へメールで報告するようにした。また、事後学習にて、実習の記録写真やVTR、毎日メールで報告した反省をもとに実習の振り返りを行った。

⑧現場実習報告会で実習の成果や課題について発表する。

→ アプリ『Keynote』（*図5）を活用して実習の成果や課題についてまとめ、現場実習報告会にて、高等部生徒の前でプレゼンテーションを行った。



図5 『Keynote』

○対象生徒の事後の活動の様子

②のエピソード

自己PR書（*写真1）の作成では、本人なりに考えて「私の趣味」「私のクラスメイト」と見出しをつけ、必要な写真は友達に依頼して撮影し、それを取り入れながら短時間で自己PR書を作成することができ、使い勝手や感想を聞いてみると、写真の貼付やコメントの入力など操作が取り組みやすいとのことであった。そして、それを事前に実習先へメールで送信し、実習先へのあいさつとした。（*写真2）



(写真2)実習先にてメール確認

実習初日には、職員、利用者の方々の前であいさつをする場面があった。慣れない環境下、人前で話すことが苦手なAであったが、作成した「自己PR書」を活用し、それを見せた。また、自己PR書は施設内の掲示板へ掲げ、じっくり見ていただくことで、Aとのコミュニケーションに大いに役立った。



③④⑦のエピソード

実習期間中は、一日ごとの実習の反省を実習日誌に記録することになっている。しかし、Aにとっては、実習日誌を出して記入欄を開き、文鎮を置いて押さえ、鉛筆を用意して手に持ち、間違ったら消しゴムで消してもらい・・・という段取りを人にやらしてもらわなければならない。そこで本来の実習日誌への記録の代わりに、再びAにとって使い勝手のよい『ジョブズの簡単！履歴書』（*図3）の「自己PR書」を活用し、カメラ機能を使って撮影した実習の様子の写真を取り入れながら一日の反省としてまとめるよう指示した。そして、帰宅報告と併せて、その日のうちに担任へメールで報告するようになった。5日間の実習期間中、日を追うごとに作成に慣れてきたようで、メールでの報告時間も日増しに早くなってきた。また、一日の反省のコメントもたくさん書いてくるようになり、充実した実習生活を送っていることをうかがい知ることができた。

（*写真3・4）



(写真3)実習中の様子から①



(写真4)実習中の様子から②

⑧のエピソード

校内での現場実習報告会に向けては、Aと相談したところ『Keynote』（*図5）を使ったプレゼンテーションに挑戦してみたいということになった。本番まで、Aは一人でKeynoteの使い方をマスターし、発表内容を考えてスライドを作成することができた。以前は人前で話すと緊張のあまり声が小さく話もまとまらない様子がみられたが、今回の報告会では、スライドを目で確認しながら発表できることから、高等部の生徒の前で堂々と実習の成果と課題について発表する姿がみられた。



(写真5)『Keynote』による発表

【報告者の気づきとエビデンス】

○報告者の主観的気づき

- ・ 肢体不自由という障がいの特性から、普段は生活全般において受け身の生活を余儀なくされているが、i P a dの活用により、自分一人で主体的に取り組み達成できる活動が増え、卒業後の生活へ向けて大きな自信へとつながったのではないかと考えた。
- ・ 校内での活用から校外での活用（現場実習）と、i P a dの活用を場を拡げ、実際に体験したことで卒業後の社会参加と自立へ移行していくための準備的な学習となり、卒業後の生活を意識することができたのではないかと考えた。

○主観的気づきに関するエビデンス

i P a dやそれに付随するアプリを活用すれば、自分にできないことや苦手なことができるようになることが分かってきたようだ。6月の現場実習においてi P a dを活用した主体性のある活動を経験してからというもの、自分の課題に対する意識づけと自己理解が進み、以下のような主体的行動がうかがえた。

人前で話をする機会に挑戦

卒業後の生活を見据えて自らのコミュニケーション能力を高めるために、苦手としていた人前でのコミュニケーションに積極的に挑戦するようになった。

- ◆ 9月：総合的な学習の時間の成果報告会でのグループ発表の司会進行
- ◆ 11月：高等部生徒会役員選挙における選挙管理委員長としての役割
： 寄宿舎での写生会役員選挙における選挙管理委員長としての役割
- ◆ 12月：校内での「英語スピーチコンテスト」への出場

これらに取り組む際は、i P a dのメモ機能を活用して事前に自分の思いや考えをまとめ、実際の場面で活用する姿が見られた。

各教科の学習にて

各教科の授業での板書をカメラ機能で撮影してもらい、記録に残して復習やテスト勉強に役立てるようになった。また、英語検定（準2級）の試験に向け、有料アプリをダウンロードして効率よく自己学習をする姿が見られた。

今後の活用を見越して

卒業後の生活での活用を見越して、自らi P a d m i n iを購入し、自宅や寄宿舎でも活用するようになった。便利そうなアプリは自分で検索し、ダウンロードして活用している。

i P a d 活用後の自己評価

Aに対し、i P a dを使い始めてからの変容について質問形式で聞き取りを行った。

Q 1. i P a dがあることで一番良かったことは？	A 1. 今までは、物事を頭の中だけで整理しようとしていたが、うまくいかないことが多かった。i P a dを使うとそれが整理でき、落ち着いているいろいろ考えられるようになった。
Q 2. 具体的にどんな場面での活用が良かったか？	A 2. 国語や数学の教科学習、そして発表する場面などでの活用が良かった。
Q 3. i P a d使う前の自分と今の自分とでは、とどのよ うに変わったか？	A 3. 物事に取り組みやすくなった。何をするにも心配することなくできるようになり、自信がもてるようになった。
Q 4. 卒業後はどのように活用していきたいか？	A 4. i P a dは自分の武器。生活が便利になるよう使っていきたい。自分にとって第二の頭脳になればいい。

○その他エピソード

実習先での iPad 講習会

Aが現場実習中、実習先から依頼されて『iPad講習会』が企画され、講師として1時間程度、iPadの使い方や利便性、アプリの紹介等について講習したとのことであった。（*写真6）その日の反省メールには「実習先の方々の関心が高く、興味をもって聞いてくださったので緊張せずうまく説明することができた。」と綴られていた。講師を務めたことで、コミュニケーション面で少し自信がついたようであった。

（写真6）『iPad講習会』の様子

余暇での iPad 活用

とある休日、クラスメイト4名で集結し、郡山市にある学校の後輩の祖父が経営する飲食店に食事をしにいく計画を立てた。Aを含めた3名は、学校のある郡山市からおよそ50キロ離れた福島市に自宅がある。最寄りの福島駅から郡山駅まで片道46分の長旅であった。Aを含め、今までに単独で電車に乗った経験はない。

Aを中心にiPadで電車の時刻や到着時間を調べ、無事に郡山駅に到着。もう一人のクラスメイトと合流し、目的の飲食店を目指した。途中、道が分からなくなり、マップ機能を活用して目的地までナビを見ながらの移動となった。移動に行き詰まると、iPad操作に慣れているAがマップを確認して指示を出す場面も見られた。（*写真7）その後、20分かかってやっと目的の飲食店に到着した。（*写真8）

（写真7）マップ機能のナビを確認中



（写真8）目的の飲食店へ到着

Aをはじめ車椅子を使用している生徒にとっては、バリアフリー化が進んでいるとはいえ、ここ福島県では単独で公共の交通機関を利用して目的地まで移動することはまだまだ難しい現状にある。そんな中、今回の経験を通してAは「いろいろな手段や支援を使えば、どこでも行けることが分かりました。行こうと思えば一人で東京にも行けるんですね。」と話していた。その手段の一つがタブレット端末であることは言うまでもない。

家族の一員としての iPad 活用

先日、Aの母親と個別懇談を行った際にうかがったエピソードである。今年の2月中旬、全国各地で記録的な大雪に見舞われた。その影響で、Aの自宅のテレビアンテナが破損し、テレビが映らなくなってしまった。家族が途方に暮れる中、Aは一人、自分のiPad miniで何かを検索し始めた。しばらくすると、母親を呼ぶAの声。Aはインターネットで自宅周辺の電気屋を片っ端から調べ、地図アプリを使ってその中でも自宅から一番近い電気屋を探し当てた。そして、Aは自分の携帯で電話をかけて修理の依頼をした。母親は無理だと諦めていたが、その電気屋は親切にもすぐに自宅に駆けつけてくれて、新しいテレビのアンテナを設置してくれた。Aのお陰でテレビが観られるようになり、家族全員が喜んだとのことであった。家族の一員として重要な役割を、タブレット端末を使うことで担うことができた。